慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	牧野信也著,『アラブ的思考様式』
Sub Title	アラブ的思考様式 (Semantial analysis of the Arabic basic pattern of thinking) by Shinya Makino (牧野信也)
Author	坂本, 勉(Sakamoto, Tsutomu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.49, No.4 (1980. 3) ,p.167(445)- 170(448)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19800300-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

牧野信也著
『アラブ的思考様式』

坂本勉

言語理論としての意味論 semantics が、イスラム思想の研究に斬新な方法論を提供し、多くのすぐれた業績を生み出してきたことは、最近の著しい傾向である。

意味論の主張は、言語において語彙はそれぞれの民族の有する世界観のあらわれであると見なし、その語彙の表わす意味領域をフィロロジカルに分析することによって、逆に世界観を照し出すことができるという点にある。この研究方法は、イスラム思想研究を印象的批評に終らせるのではなく、思想そのものをイスラムの内在論理に即して帰納的、実証的に分析するという点ですぐれた方法ということができるであろう。

牧野信也教授の近著『アラブ的思考様式』は、このような意味論の立場にたつイスラム思想研究の一端である。牧野教授は、既に井筒俊彦教授の **"The structure of the Ethical Terms in the Koran", Tokyo,** 1959 を『意味の構造』(新泉社、昭和47年)のタイトルで翻訳・紹介し、みずからも『創造と終末』(新泉社、昭和47年)を世に問い、その後も一貫して意味論的研究に沈潜してこられた。このたびの近著は、この延長の上に書かれたものであるが、二つの点で公刊された意義があると思う。第一は、一般読者を対象とした啓蒙書のかたちをとりながら比較的平易な言葉でイスラム思想の意味論が説かれていること、第二は、牧野教授の問題関心、扱う研究領域が前著『創造と終末』にくらべると広がっていることである。

本書は、以下の章から構成されている。

まえがき　あれから二十年
はじめに　アラブとは
第一章　アラブの言語にみる両極性
第二章　アラビア語の両極性とアラブの思考様式
第三章　人類学的側面からの傍証
あとがき

書評の手順として、章別構成にほぼそいながら内容を紹介していくことにするが、必ずしも忠実に逐うのではなく、私自身の問題関心にしたがって重要と思われる点を整理し、批評を加えていくことにしたい。

さて、言語と思考様式とが相互に依存関係にあるという意味論の立場にたつかぎり、言語分析は何にもまして前提条件となるべきものである。その際、難しい問題は、思考様式の分析手段である言語として何に拠るべきかということにある。言うまでもないことだが、どの言語も多かれ少かれ、文章語と口語、共通語と方言というように同一言語の内(なか)で二極構造をもち、そのどちらも思考の基礎になっているからである。

アラビア語も例外でなく、むしろ、他の言語にくらべるともっと特殊な事情にある。牧野教授は、アラビア語の二極構造がフスハ（共通語・正則語）とアンミーヤ（方言）から成ることを指摘したあと、フスハを分析の手段として選ぶと言明する。その理由は、フスハが、アラブ全体の共通語、書き言葉であるにとどまらず、時として知的・公的なレヴェルでは、話し言葉の機能も果し、思考の基礎としてアンミーヤより遥かに重要であるということにある。

牧野教授のこの選択は、問題を絞るという意味で賢明な、当を得た研究手続であるといわなければならない。ただ、このようにアンミーヤを当面の分析からはずしたことによって、アラブの概念がフスハの枠でくくられた包括的なそれに限定して論じられること、その結果、アラブの地域性が捨象されたことを私たち読者は了解しておかなければならないであろう。

牧野教授が本書の中で一貫して追求するテーマは、アラブの思考様式における「対立の逆説的統合」という基本パターンについてである。「対立の逆説的統合」とは、そもそもどういうことなのか、なぜこの概念を提唱するにいたったのか、これらの諸点については後述することにして、今はさしあたり、サニア・ハマディや牧野教授自身がダマスカスで体験したアラブの行動形態、価値観における矛盾したものの同居のことだと理解しておけばよいであろう。

牧野教授は、書名に『アラブの思考様式』と掲げるにもかかわらず、当世流行の比較文化論としての思考様式の具体的なあり方を列挙することを全く意図していない。思考様式そのものでなく、それを生み出し、支えるところのアラビア語の言語構造に主要な関心があるのである。したがって、第一章は、アラブの思考様式の二元性、「対立の逆説的結合」に照応するアラビア語自体の両極性の諸事実が列挙されるのである。

それらを煩をいとわず整理すると以下のようになる。(a)フスハは、アンミーヤを中核として形成される連続した存在でなく、対立するものである。(b)音韻組織は、子音と母音が数と語形成の際の役割において著しい対照をなす。つまり、子音の数が28にたいし、母音の数は僅か3にすぎない。子音の組合せによって「語根」は基本的意味を獲得するが、母音は意味にヴァリエーションを与えるにすぎない。(c)品詞群は、機能の上で窮極的に名詞と動詞の二つに収斂する。(d)動詞の完了形と未完了形は、それぞれ形態、意味、機能において両極をなす。(e)語彙は、一つの単語が同時に正反対の二つの意味を含むことがある。(f)文領域では、名詞文と動詞文、また名詞文の内部で主語と述語の対立がみられる。

以上の事実は、アラビア語の基礎文法を終えた初心者であれば誰でも容易に理解できるよう平易に説明されているが、言語学的に検討しなおした高等文法として読めば、創見と示唆に富み、私たちを裨益するところが多い。しかし、言語上の両極性の事実すべてが、思考様式の二元性に対応すると考えることは危険であろう。(e)、(f)の意味論の領域に本来、属する事柄は別としてもその他の諸事実は直接の相関々係が認められないからである。両極性の事実が詳しく指摘されたことは貴重であるが、その対立の質がそ

れぞれに違うこと、それが思考様式の二元性といかに関わるか、納得のいく説明が欲しいと思うのである。

第二章において、牧野教授はアラビア語の言語構造にみられる両極性が、思考様式の二元的な対立に帰着すると主張する。すなわち、「民族としての性格、文化、社会、国家の構造など、さまざまな面でわれわれは二つのものの対立に出あう」というのである。

牧野教授は、アラブの思考様式を以上のように二元論として把えるのであるが、それがゴティエ、セルーヤのように単純素朴な二元論と同じであると理解することは早計というものである。牧野教授は、二元的なものの対立が、アラブの場合、対立に終始するのでなく、実は他面で結びつき、一元化されると主張し、これを「対立の逆説的統合」と呼ぶからである。

この概念は、本書で繰返し主張されるユニークなもので、本書の核心をなす。牧野教授は、この概念を意味論の研究者にふさわしく、アラビア語の文の基本構造の分析から帰納的に導くのである。これを要約すると以下のようになる。すなわち、アラビア語の名詞文は、主語と述語が相互にはっきりとコントラストをなすが、その主な根拠は、アラビア語がヨーロッパ諸語のように繋辞(is, sein, être)をもたず、それ故、主語と述語は順説的に統合されず対立的な状態にあるからだという。しかし、主語と述語は対立のまま終始するのではなく、文頭に置かれた小辞 inna の文法的機能によって、両者の対立関係は逆説的に統合されるというのである。

牧野教授は、アラビア語の名詞文における主語と述語の、このような小辞 inna を介しての「対立の逆説的統合」の関係は、対立的なものを一元化するというアラブの思考様式の基本的パターンに合致すると考える。この名詞文の分析過程は、鋭い着想にささえられて説得力に富む結論をひき出したといえる。しかしながら、私は牧野教授の論証に若干の手落ちがあることを認めないわけにはいかない。それは、名詞文について胸をすくような分析をみせたにもかかわらず、動詞文の「対立の逆説的統合」について何ら触れていないからである。動詞文は名詞文とともに思考の発現の場である「文」を構成するはずである。だとすれば、これに対する説明がないと牧野教授の仮説は、片肺のままの提示ということになりかねないと思われる。

第三章は、アラブ的思考様式の基本的パターンとして抽出した「対立の逆説的統合」が、遊牧アラブの社会構造にも検証できることを説いたものである。この章は、意味論の手法を社会構造の分析にまで牧野教授が広げて意欲的に適用したということで格別、重要である。

歴史学、社会学の立場からすると社会構造を意味論的に解釈することの当否は、問題のあるところである。しかし、牧野教授の真意を誤解しないために社会構造の概念の理解が、意味論の場合、ちがうことを確認しておくことは無意味でない。牧野教授は、社会構造を具体的、現象的な面でとらえるのでなく、社会のもつ固有の傾向、根本的なあり方、そしてより具体的には「遊牧アラブの社会においてたとえば個と全体はどのようにかかわりあってい

るか」という点でとらえるのである。

牧野教授は、コール、片倉もと子両氏の遊牧アラブにかんする人類学調査報告にもとづき社会構造に「対立の逆説的統合」の原理が貫くことを強調する。この論証過程は、理解の容易なところもあれば、難しいところもある。メッカ近郊のワーディー・ファーティマの定着遊牧民における夫婦関係の説明は明晰である。結婚契約と結納金の慣行は、婚約と同時に離婚の可能性をも予測し、それに伴う措置が盛りこまれているが、これは結婚と離婚とがつねに背中合わせに併存する流動的な、契約によるアラブの夫婦関係を「対立の逆説的統合」の原理で法的に表現したものに他ならないというのである。

他方、ルブ・アル・ハーリー沙漠に遊牧するムッラ族の社会構造を個（＝家族）と全体（＝部族、支族、氏族）との一種の対立の場として理解する仕方は、難解である。季節ごとの遊牧移動、生態学的環境によってムッラ族の全体の中で有効に機能する集団が、部族、支族、氏族と流動的に変り、それに対して家族が常に自律的な存在であるという指摘は納得できるとしても、なにゆえに両者が対立的なのか、また、その対立的な事実をいうことによって、ムッラ族の社会構造のいかなる特殊性を明らかにできるのか、必ずしも明確でないような気がするのである。

以上、私は各章の内容を紹介し、疑問と思われる点につき若干の批評を行ってきたが、最後に本書の価値を総合的な視点から述べてみることにしたい。牧野教授は、前著『創造と終末』においてもっぱら鍵概念の分析に絞っていた。このことは言葉をかえていえば意味論の分析を語彙にだけ限定して行っていたということであるが、本書では「対立の逆説的統合」を立証するために文の構造、とりわけ名詞文の性格に鋭くメスがあてられた。この試みは動詞文について問題が残されているが、意味論の新しい領域への踏みこみという点で高い評価が与えられるべきであろう。同じようなことは社会構造を意味論的に解釈したことについてもいえる。ただ、この場合、社会構造の概念が意味論と歴史学とではとり方が違うので、意味論の有用性がすぐにも社会構造の分析に結びつくと考えるのは速断というものであろう。セマンティクスは歴史学のフィロロジーに依然としてとって代ることができないというべきであろうか。

（昭和54年、講談社（学術文庫）刊）

前号訂正

「史学」第四十九巻第二・三号の三四頁一三行目の「籍」×
館府外国局日誌」の籍は箱に訂正致します。○